

# 憲法と平和の福音



司祭 ヨハネ 井田 泉

聖公会平和ネットワーク・全国の集い

2008年10月12日

京都聖三一教会にて

## 1. はじめに——麻生太郎新首相の所信表明演説から

2008年9月29日、麻生太郎新首相は初めての所信表明演説の冒頭で次のように述べました。

「わたくし麻生太郎、この度、国権の最高機関による指名、かしこくも、御名御璽<sup>ぎよめいぎよじ</sup>をいただき、第92代内閣総理大臣に就任いたしました。」

「御名」とは天皇の名前、「御璽」とは天皇の印（判子）です。たしかに手続き上はそうなっているとしても、それが首相就任にとって最も大事なことと受けとめ、そう発言していることに大きな問題があります。この麻生氏は、憲法の根幹、「主権在民」ということを忘れていてのではないだろうか。いや、それを知りつつそれを軽んじ、御名御璽＝天皇の権威の方に重心を移そうとしているのではないでしょうか。

「かしこくも、御名御璽をいただき」と彼は言いました、「かしこくも」とは天皇陛下を畏れかしこんで、謹んで申し上げるということです。これは1945年8月15日まで、大日本帝国が滅びるまで通用した言い方です。

「かしこくも」という言葉について一言触れておきます。大日本帝国憲法には、その本文の前、頭に「告文（こうもん＝天子が臣下に告げる文）」というのがあります。その最初はこうです。

「皇朕（わ）レ謹（つつし）ミ畏（かしこ）ミ皇祖（こうそ）皇宗（こうそう）ノ神靈（しんれい）ニ誥（つ）ケ白（まう）サク……」

神聖不可侵の天皇が、臣下（家来）である国民に告げる前に、天皇の祖先である神々に告げる、という順序になっています。冒頭に「<sup>つつし</sup>謹 <sup>かしこ</sup>ミ 畏 <sup>かしこ</sup>ミ」という言葉が出て来ます。麻生新首相は、天皇を再び神聖なものにしようとしている。これによって「主権在民」を宣言した日本国憲法の根幹精神は危機にさらされています。

麻生氏が「かしこくも」と畏れ尊んでいるその「御名御璽<sup>ぎよめいぎよじ</sup>」によって何が行なわれたか。一つを挙げておきます。

1910年、日本は韓国（朝鮮）の独立を奪い、植民地としました。それを公に宣言した天皇の言葉、「韓国併合の詔<sup>みことりのり</sup>」（明治43年8月29日）を紹介します。

「朕<sup>ちん</sup> 東洋ノ平和ヲ永遠ニ維持シ帝国ノ安全ヲ将来ニ保障スルノ必要ナルヲ念ヒ又常ニ韓国ガ禍乱ノ淵源タルニ顧ミ曩ニ朕ノ政府ヲシテ韓国政府ト協定セシメ韓国ヲ帝国ノ保護ノ下ニ置きキテ禍源ヲ杜絶シ平和ヲ確保セムコトヲ期セリ……朕ハ韓国皇帝陛下ト與ニ此ノ事態ニ鑑ミ韓国ヲ挙テ日本帝国ニ併合シ以テ時勢ノ要求ニ応ズルノ已ムヲ得サルモノアルヲ念ヒ茲ニ永久ニ韓国ヲ帝国ニ併合スルコトトナセリ……御名御璽」

こういうところに「平和」が使われています。自分（天皇）は東洋の平和と大日本帝国の安全のために、常に韓国が禍（わざわい）と混乱の原因になっていることを顧みて、韓国を日本のものにし、その禍と混乱の源を根絶する、というのです。その詔（天皇が臣下である国民に<sup>くだ</sup>下す言葉）は御名御璽によって權威を持ち、効力を発揮するのです。

韓国・朝鮮が天皇の名によって日本に併合され、天皇の名によって酷い支配を受けたことをはっきりさせておきたいと思います。1925年、ソウル（当時は京城）の南山に朝鮮神宮が創立されました。天皇の祖先とされる天照大神と、実際にその名によって朝鮮を併合した明治天皇と、この二つを朝鮮神宮の祭神とし、やがてそれを朝鮮の人々に拝むように強制しました。「一面一社」と言って村ごとに一つの神社を建てる方針が打ち出され、日本統治の末期には朝鮮全体に1000に及ぶ神社ないしそれに準ずるものが建てられていたと言われます。その全体を統括するのが朝鮮神宮でした。

ここに持っているのは「朝鮮イエス教長老会総会会議録」です。当時のものの復刻版です。これには痛ましい記録があります。今から70

年前の1938年の秋、朝鮮の長老教会総会は日本の強圧によって神社参拝を決議させられました。わたしたちの主にある兄弟姉妹はこれによって民族の誇りと信仰の良心を傷つけられました。抵抗した人は数多く、逮捕・拷問の末およそ50名の方が殉教しました。このような歴史に触れるとき、日本国憲法のもとにある首相が「かしこくも御名御璽いただき」と言うのがどれほどひどいことであるかを思われます。

今は麻生新首相の所信表明に関して、「主権在民」が危機にさらされていると言ったのですが、もう一つ重大な問題があります。麻生氏はこう言っています。

「申し上げます。日本は、強くあらねばなりません。強い日本とは、難局に臨んで動じず、むしろこれを好機として、一層の飛躍を成し遂げる国であります。」

「わたしは、日本国と日本国民の安寧にとって、日米同盟は、今日いささかもその重要性を失わないと考えます。事が国家・世界の安全保障に関わる場合、現在の国連は、少数国の方針で左右され得るなど、国運をそのままゆだね得る状況ではありません。」

つまり国連よりも日米軍事同盟を優先する。アメリカと結んでいっそうの軍事化を進めるという宣言です。

## 2. 日本国憲法の本質——三つの幹

戦争と植民地支配、自由の抑圧の悲惨な経験から日本国憲法が生まれました。その本質を三つにまとめることができると思います。

**第一は、「主権在民」です。**普通「国民主権」と言われるのですが、憲法の英語文を見ると”people”となっていて「人々」「人民」なのです。これを「国民」と限定するところに問題が生じますが、今日はこれには触れません。主権は、大日本帝国の天皇にあるのではなく、わたしたちにあるのです。

第二は、「戦争放棄」「絶対平和主義」です。

第三は、「基本的人権の保障」です。この中には思想、良心、信教の自由が含まれます。

これらの憲法の精神を、前文の言葉を用いて、いま仮に一つに絞ってみたい。それは「平和のうちに生存する権利」、平和的生存権（あるいは平和的共存権）です。これが脅かされ、奪われつつある、というのが今の状況だと思います。

「日本国憲法 前文」を確かめてみましょう。

「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを**決意し**、ここに**主権が国民に存することを宣言し**、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、**恒久の平和を念願し**、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、**平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ**。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、**平和のうちに生存する権利を有することを確認する。**」

「戦争の惨禍を再び繰り返さない」という決意がここにはこめられています。専制と隷従、圧迫と偏狭、恐怖と欠乏の苦い経験か

ら、「主権在民」「戦争放棄・絶対平和」「基本的人権の保障」がこの憲法で宣言されました。しかしこれらが脅かされ、奪われつつあるのが、今日の状況です。

### 3. ルカ福音書における平和の使信

さて、以上のような憲法の本質と聖書の福音がどのようにつながっているか、というのが今日の主題です。聖書全体にわたってお話することはできませんので、ルカによる福音書に絞りたいと思います。今週の土曜日、10月18日は福音記者聖ルカ日です。

#### (1) ザカリアの歌 洗礼者ヨハネの誕生

ルカ福音書に最初に「平和」が出て来るのは、洗礼者ヨハネの誕生物語です。祭司ザカリアは天使によって口を封じられていたのですが、子どもが生まれ、天使に告げられたとおりに「この子の名はヨハネ」と板に書いたとき、口が開き、舌がほどけ、神を賛美して言いました。祈禱書の「朝の礼拝」でも用いられる「ザカリアの賛歌」の終わりのほうです。

「幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、

主の民に罪の赦しによる救いを／知らせるからである。

これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、／高い所からあげぼのの光が我らを訪れ、

暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、／我らの歩みを平和の道に導く。」ルカ 1:76 - 79

幼子は救い主のために道を整える者となる。神はこの世界と人への愛のゆえにこの地上の現実を放置することはできない。神の憐れみは溢れ、光となって暗闇と死の陰に苦しむ者を照らし、「我らの歩みを平和の道に導く」。救い主の到来の意味と目的はわ

たしたちを平和の道に導くことなのです。

## (2) 降誕、天使の合唱

ルカ福音書で2番目に「平和」が出て来るのはクリスマス物語です。ベツレヘム近郊の羊飼いたちが、夜、羊の群れの番をしていました。主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れま  
す。天使は言います。

「『恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。』すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

『いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ。』」2：10 - 14

「地には平和」。天使の合唱は、平和を奪われ、脅かされている人々の願いを代表しています。救い主の降誕は、地上に平和をもたらそうとされる神の意志の実現の開始なのです。

## (3) 福音の宣言——ナザレでの礼拝

それから30年が過ぎ、イエスは公に活動を開始されました。あるとき故郷ナザレに来て、安息日の会堂礼拝に参加されました。聖書の朗読しようとして立たれ、預言者イザヤの巻物を開くと、こう書いてある箇所が目にとまりましたのでそこを読まれました。

「主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回復を告げ、／／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためであ

る。」ルカ 4:18 - 19

ここには「平和」という言葉は出て来ませんが、「解放」「回復」「自由」が語られています。これらと平和とは一体であって、憲法の本質と通じています。

聖書を朗読した後、イエスはイザヤの巻物を係の人に返して座られるのですが、その朗読をとおして聖書の言葉が会堂に集まっている人々の心に強く響いたため、何かを語ってくれることを期待して人々の目がイエスに注がれました。そこでイエスは話し始められました。

「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した。」  
ルカ 4:21

福音の宣言です。抑圧からの解放と自由——これがイエスの存在とともに、その言葉とともに、いま実現し始めた。このためにこそイエスは来られたのです。

ところで、ここで朗読されたのはイザヤ書 61:1-2 です。かつて預言者をとおして語られたことが、いまイエスによって現実となる。イザヤ書とルカ福音書を読み比べると少し違っているところがあります。イザヤ書の方を途中から読んでみます。

「主が恵みをお与えになる年／わたしたちの神が報復される日を告知して／嘆いている人々を慰め

シオンのゆえに嘆いている人々に／灰に代えて冠をかぶらせ／嘆きに代えて喜びの香油を／暗い心に代えて賛美の衣をまとわせるために。彼らは主が輝きを現すために植えられた／正義の樅の木と呼ばれる。彼らはとこしえの廃虚を建て直し／古い荒廢の跡を興す。廃虚の町々、代々の荒廢の跡を新しくする。」61:2-4

2、3 節に「嘆いている人々」が 2 回出て来ます。嘆いている人々をこそ、神が目にと留められる。慰めと賛美を与えられる。そればかりではありません。

「彼らは主が輝きをあらわすために植えられた／正義の樅の木と呼ばれる。」

嘆いている人々こそ、主なる神の輝きをあらわす存在。そのために植えられた正義の樅の木。しっかりと立って主の正義をあらわし、荒廃した世界を復興させる主体となる、というのです。

#### (4) エルサレム入城

それからおよそ 3 年が過ぎ、イエスの生涯は終りに近づきます。主はそこで最期を迎えることを覚悟してエルサレムに近づかれます。

「イエスがオリブ山の下り坂にさしかかれたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。

『主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。

天には平和、／いと高きところには栄光。』」ルカ 19:37 - 38

あの降誕のとき、ベツレヘム郊外に響いた天使の合唱がここにこだましています。ただ、微妙な違いがあります。あときは「いと高きところには栄光、神にあれ、／地には平和、御心に適う人にあれ」であったのが、ここでは「天には平和」と歌われています。

ルカから離れますが、ヨハネの黙示録には天における天使と悪魔の戦いが描かれている箇所があります。

「さて、天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだのである。竜とその使いたちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らの居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた。」12:7 - 9

天からは悪の力が突き落とされた。天にはすでに実現している平和が、イエスとともにここ、地上にも実現するように——その願いが「天

には平和、いと高きところには栄光」という賛美になったのでしょうか。あるいは、まだ天では戦いが続いていることを感じ、天に平和が実現することを文字どおり祈り求めているのかもしれませんが。天の平和が地上の平和をもたらす。いずれにせよ、イエスのエルサレム入城に際して、平和の実現が祈られ、歌われた。今がその時なのです。

ヨハネの黙示録はローマ帝国のキリスト教迫害のもとで書かれた一種の秘密文書です。ローマ皇帝は自らが神であると称し、帝国は皇帝を礼拝することを強制しました。国家権力は悪魔的力を振るい、真実に生きようとする人々を迫害している。しかし必ず悪の勢力は天から投げ落とされ、滅ぼされる。最後は神の正義と平和が世界を覆い、人の目から涙がぬぐわれる。

日の丸、君が代の強制に苦しめられている方々のことを思うとき、聖書はその大きな味方として呼びかけてきます。

ルカ福音書に戻って先ほどの続きを読みましょう。

「『天には平和、／いと高きところには栄光。』

すると、ファリサイ派のある人々が、群衆の中からイエスに向かって、『先生、お弟子たちを叱ってください』と言った。イエスはお答えになった。『言っておくが、もしこの人たちが黙れば、石が叫びだす。』」  
19:38 - 40

平和を求める祈りと賛美を沈黙させることはできない、とイエスは言われたのです。

その後、イエスは泣かれます。

「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、言われた。『もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまう

だろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。』」19:41 - 44

「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……」。洗礼者ヨハネの誕生に際して父ザカリアが歌った「平和の道」が、今はイエスの口から嘆きと涙とともに語られます。平和への道を確認することがイエスの悲願であった。しかし「神の訪れてくださる時」をわきまえないために、世界は戦争と破壊に向かって突き進んでいる。イエスはそれを予見して泣かれたのでした。今の日本のこの現実を前にしてイエスは泣かれるのではないのでしょうか。

しかしルカ福音書はこれで終わるのではありません。

## (5) 復活

イエスの十字架の死から三日目の日曜日の午後、ふたりの弟子がエルサレムを脱出してエマオの村目指して歩いていました。そこに見知らぬ人が道連れとなりました。話しながら何時間もかかって山道を下っていきます。夕暮れになってエマオに到着。弟子たちはその人を家に迎え入れました。夕食の席でその人がパンを取り、祝福してそれを裂いたとき、弟子たちはそれがイエスであるとわかりました。疲れているはずなのに二人はすぐに家を出発して、先ほど来た山道を何時間もかかって引き返し、エルサレムの仲間を訪ねます。道であったこと、パンを裂いてくださったときにイエスとわかったことなどを話していたとき……

「こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。」ルカ 24:36

イエスが平和を呼びかけられます。平和の呼びかけは弟子たちの中に平和をもたらします。

その誕生の前から、わたしたちを平和の道に導く方として歌われた救い主イエスは、平和の道の実現のためにいのちをささげ、復活して平和を呼びかけられます。このようにルカ福音書は、平和の主イエス・キリ

ストを最初から最後まで指し示しているのです。

#### 4. おわりに——聖書と憲法に通底する平和への決意と情熱

ザカリアは「神の憐れみの心」（ルカ1：78）と歌いました。彼によれば、神の憐れみは溢れ出て、わたしたちを平和の道に導こうとされるのです。ここに神の情熱と決意があります。神の情熱と決意はそれに触れるわたしたちの中にも情熱と決意を引き起こします。別の言い方をすれば、聖霊はわたしたちの主体性を喚起するのです。

先ほど憲法の語るとおりわたしたちが主権者であると言いました。あのエマオの弟子たちは、復活のイエスに出会って、再び長い山道を歩いて危険なエルサレムに戻り、経験と思いを分かち合いました。復活の主によって主体的を呼び覚まされ、励まされた信仰者の姿です。憲法の実現するのは、主権者、平和実現の担い手としてのわたしたち、主体性を呼び覚まされたわたしたちなのです。

主権、平和、基本的人権の中身である自由。ルカ福音書をとおして見たように、憲法の三つの根幹は聖書の福音の中核をなしています。

イザヤ書からクリスマスに関する箇所のひとつを聞きましょう。

「ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、『驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君』と唱えられる。

ダビデの王座とその王国に権威は増し／平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって／今もそしてとこしえに、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。」9：5 - 6

平和の君、救い主イエス・キリストを地上に送ってくださった主の熱心がわたしたちのうちに働いて、わたしたちを平和の実現のために熱心に祈り働く者としてくださいますように。